

## 現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 九州大学

学部・研究科等名 理学部・理学研究院

## 1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」

## 2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 「研究成果の状況」

(1) 平成 21 年度グローバル COE プログラム「自然共生社会を拓くアジア保全生態学(拠点リーダー: 大学院理学研究院矢原徹一教授)」の採択

平成 21 年度文部科学省の平成 21 年度グローバル COE プログラムに、九州大学からは唯一、本拠点が採択された。この採択は、「国際的に前例がない」と Science (July 16, 2004) に紹介された九州大学新キャンパスでの約 100ha にもわたる大規模な生物多様性保全事業、また学内プロジェクト「生物多様性の保全と進化に関する研究拠点形成」(代表者: 矢原徹一、2004-2006) などにより、本プログラムに参加する専攻群の連携体制を整えるなどの研究戦略により達成されたものである。G-COE 採択後は様式 2 の業績番号 51~65 に見られるように研究活動は飛躍的に向上した。さらに九州大学総長直轄の東アジア環境研究機構(平成 21 年 4 月設置)においても G-COE の本研究院教員は「環境共生コンソーシアム」を担当して中心的な役割を担い、学部研究院等を代表する多くの研究業績をあげている。

(参考資料: 九大学ホームページ <http://www.kyushu-u.ac.jp/research/topic/global-coe.php>。

(2) 九州大学主幹教授、九州大学高等研究院への多数の採用

平成 21 年 4 月、九州大学は「本学の教授のうち、その専門分野において極めて高い業績を有し、かつ本学の研究戦略の先導的な役割を担う者」に主幹教授の称号を付与する制度を施行した。主幹教授陣は、自由闊達な発想と洞察によって世界に誇りうる先進的な知的成果を生みだす、という九州大学の使命の中でも中心的役割を担う極めて重要な位置づけにある。理学研究院からは、最近の研究成果に基づく当研究院の研究業績の高さが評価され 6 人(工学研究院は 3 人、数理学研究院は 3 人、医学研究院は 5 人など)が採択された。

また平成 21 年 10 月、「本学のノーベル賞級の極めて高い研究業績を有する研究者や次世代を担う若手研究者が高度な研究活動を行う場」として、大学は部局を超えた全学組織として高等研究院を設立した。理学研究院からは香月高等研究院長(化学部門)、次世代スーパースター養成プログラム(SSP)から 4 名の SSP 特任准教授が採択され、理学研究院の研究レベルと研究業績の高さが示された。

(参考資料: 九州大学ホームページ <http://www.kyushu-u.ac.jp/pressrelease/2009/2009-03-13-01.pdf> および <http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/search/organization/03170000/index.html>。様式 2 の業績番号 20~28)

平成 21 年度に文部科学省および九州大学で採択あるいは採用された以上の事例は、理学研究院に所属する教員および研究員の研究成果の状況が極めて良好であったことを示している。